
白の夜叉と銀の・・・

カヲル君を愛してる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の夜叉と銀の・・・

【Nコード】

N0015W

【作者名】

カヲル君を愛してる

【あらすじ】

突然の電話に出た銀時そしてそれを境に姿を消した銀時
その何日か後に辻斬りが・・・
注意オリキャラが出るかもです

第零章 まだ始まったばかりかなのに話してるのが多いし万事屋しかでないし――

銀魂の小説書きますよお

気合いれるぞ

オリキャラいつか出します

サブタイは土方とズラの叫びです

「ズラじゃない桂だ」ww

第零章 まだ始まったばかりかなのに話してるのが多いし万事屋しかでないし――

「銀さーん、朝ですよー」

「あと4時間……」

「どんだけ寝る気だよ」

「いいだろう別にイ」

「良くないネ、飯が食えないのアル」

「いいんですかあパフェ奢ろうと思ったのになあ」

「ハイっ起きますー!!」

新八パフェ奢れよー!!」

「ええっやっぱり起きた理由それかよ」

「いいから早く飯食うのネ」

ジリリリン

「あっ電話アル」

「俺が取るわ」

「珍しいですね」

「明日雨が降るヨ」

「んなこたあねえよ」

ガチャリ

「はい万事屋です」

「銀時かあ?」

「そうだけどあ」

「『時』が来たぜえ」

「ああ分かったじゃまた後でなあ」

「そうだなあ」

ガチャン

「依頼ですか?」

「いや俺のダチだった」

「ダチいたアルカ？」

「いるからねいますからね
5日ぐらい帰らねえから」

「なんでですか？」

「ダチに会うから」

「そうアルカ」

「わかりました」

「じゃあ行ってくるから」

「ハイ行つてらっしゃい」

「いってこいアル」

「おう」

この時神楽とデメグ・ゴフンツ新八はあんな悲しい事が起きるとは
分からなかった

第零章 まだ始まったばかりかなのに話してるのが多いし万事屋しかでないし――

新「作者今ダメガネ言いかけたよねっ」
作「っさ・・・さぁ知りませんっ」

こんな感じでやっていきますんで宜しく
神楽の喋り方が難しい・・・

第一章 いつどこで裏切られるのかがわからねえ（前書き）

よし書きますよお

神楽ちゃんのしゃべり方知らないし……

てかあんまアニメみてねえよ

見ないとなあDVDかりよおかな？

でもかねないし……ブツブツ

短いですよ

では本編ヘレスGO！

投稿した矢先に……書き直し文才がほしいよ

第一章 いつどこで裏切られるのかがわからねえ

「ふあああ よく寝た」

「よく寝んなあ」

「悪いか寝たら低杉」

「誰が低杉だあゝゝ」

「いいじゃねえかよ、そろそろあの人のところ行くか」

「そうだな」

場所は変わって万事屋

「銀さん今頃誰と会ってんのかな？」

「さああからないアルヨ、それよりダメガネ酢昆布買ってくるヨロシ」

「自分で行けよ！！！！！」

いつものようにふざけていた……

「先お前から喋るか？」

「いや俺はいいお前は何か喋んないのか銀時イ」

「ああそうさせてもらっわ」

と語っていた

「なんか嫌な事がありそうだな
いつてみるかあの人のとこに」

「どこいくんですか??桂さん」

「先生と話してくるだけだ」

「わかりました、では気をつけて」

「ああ」

と攘夷志士の桂が言った

第一章 いつどこで裏切られるのかわからねえ（後書き）

半端ですみません

適当でスミマセン

桂さんのしゃべりもわからん

オマケ

新「ねえなんで桂さんは間違えないで僕だけダメガネって間違えるの??」

作「さあしりません〜」

桂「ところで宿題は終わったのか??」

作「えっ宿題いえんぜんてつけてません」

高「じゃあ俺が教えてやるよ」

桂「なっどこから出てきた!!」

作「高杉さん／＼／＼／＼はい教えてください」

高「ヅラ別にいいだろ作者いいぜえ教えてやるよ」

作「高杉さん大好き／＼／＼」

近「いいなあ俺も大好きって言われたい」

作「ゴリラはだまつとけえ」

面白かったかな??

第二章 どうしてはなさねえのか意味わからねえ（前書き）

今日2度目の投稿なのに短いww
温かい目で見てね^^

第二章 どうしてはなさねえのか意味わからねえ

「ここは先生の墓場」

「なあもういいかあ？」

「ああいいぜ」

「じゃあ行くかこの世界をぶっ壊しに」

「そおだなあ」

「でっそこに居るヅラでてこいよお」

「気づいていたかそれに私はヅラじゃない桂だ！……！！！」

「クククッ どっちでもいいじゃねえかあ」

「でっ銀時は何故高杉と居る？」

「いいじゃんべつにいい関係ないでしょ」

「では何故こやつと一緒にこの世界を壊しに行くのだ？？」

「決まってるだろおが、先生を奪った幕府に仕返しに行くためだろが！！」

「ではリーダーと新八君はどうするのか？」

「ええ別に斬るだけだよ 邪魔したらね!!」

「なっお前はあいつらを斬れるのか?」

「斬れるさだつて赤の他人+敵なんだからよお」

「高杉お前銀時に何を吹き込んだ?」

「クククッ何にも吹き込んでなんざあねえさ
これはこいつとの約束なんだよお」

「銀時は何故黙っていた?」

「言う理由ねえだろ」

「じゃ行くか銀時イ」

「そうだなじゃあな桂」

「桂ではないツラだつ」

「クククッ間違えてやがるぜえ」

「おい作者何故こうシリアスな場面を壊す??」

すみませんツラさん

「ツラじゃない桂だあああ
てかもういないし」

3日後

「屯所にて」

「なに白夜叉が誰だかわかっただど!!!」

鬼の副長 土方が叫んだ

「わかった今から近藤さんのところに行く山崎は総悟呼んで来い」

「わかりました」

第三章へ続く

第二章 どうしてはなさねえのか意味わからねえ（後書き）

ああまた半端で終わらせてしまった

読者の皆さん本当にすみません m (_ _) m

それでは B A Y B A Y

第三章 PCがツンデレになりやがった〜（前書き）

サブタイが思いつかないので

自分の気持ちをかいたらこうなった・・・

今日も短いです。

第三章 PCがツンデレになりやがった〜

〓〓屯所〓〓

「近藤さんも総悟もそろつたか山崎話してくれ」

「ハイ驚かないで聞いてください」

実は万事屋の旦那が白夜叉だったんです!」

「ええ〜そんな分けないでしょ」

よりもよって旦那がそんなことするはずないよお」

「そうだぞ何かの間違いじゃないの?」

「いや近藤さんそれは多分本当の事だろう」

「トシなんで本当の事だと思っただ?」

「いや簡単な話だ、白夜叉は銀の髪に紅い瞳白い羽織だったよな
その特徴がはまり過ぎじゃねえか?」

それにあいつは自分の過去の事を話さねえ

それに攘夷志士だったらあの腕の強さも納得いくし

紅桜の一件で桂と高杉に会っていた事も分かる」

「それはそうだな」

「でも本人に聞かないとわからねえだろお」

「その事についてですが旦那は3日前から帰っていません」

「何??それは本当か山崎!!」

「ハイそのようです

旦那に会いに行ったのですがあと2日ぐらい帰ってこないそうです」

「そうかわかったこれからは高杉の様子を探れ」

「ハイ分かりました」

「土方コノヤローは旦那が白夜叉だと分かったら斬るの?」

「・・・・・・斬らないといけないな」

「でもトシお前にかなう奴か?」

「近藤さんこの人は無理だよ一回負けてるもん」

「そんな事関係ねえんだよ!!!!!!!!!!!!!!」

「まあこのことは万事屋が帰ってきてからな!!」

「ああ／＼ハイそれじゃサボる」

土方たちはまだ大変な事になると誰も思っていなかったのだろう

第三章 PCがツンデレになりやがった〜（後書き）

真新組だけだよ

高杉出したかった^^

オマケ

沖「ねえ作者さんは誰が好きなの??」

作「えつとねえ〜神威と白夜叉に高杉に沖田に多串君に山崎にツラです」

土「誰が多串君だ!!!」

ツ「ツラじゃない桂だ!!!!!!」

沖「土方コノヤローと俺どっちの方が好きなんでさあ?」

作「もちろん総悟君の方が大好き!!!!」

沖「じゃあ付き合って」

作「ノノノいいよおノノノノ」

神「作者は僕のものなんだよ」

作「ええええ〜」

きりがないのでおしまいwww

第四章 小説読んだら・・・壊れたあ~~~~~（前書き）

サブタイはさつき読んでた小説の感想デス

壊れたものは判断力などです

2次元行きてえ~~~~~

第四章 小説読んだら……壊れたあゝゝゝゝ

6日後〓〓万事屋〓〓

「銀ちゃん帰ってこないアル」

「そうだねなんかあったのかな？」

すると

ピンポーン

「ダメガネ行ってくるアル」

「ダメガネじゃないですよ!!!!」

「いいから行ってくるヨロシ」

「本当に人使いが荒いんだから」

「ハゝイなんか御用ですか??」

「土方さんそれに皆さんどうしたんですか?」

「旦那は居ますかゝイ」

「今いないですけど……」

「やっぱしか

どこに行ったか知ってるか??」

「えっと友達に会いに行くから5日は帰らないって言われたんですけど・・・6日たった今も帰ってこなくて」

「なんだ税金泥棒ぢやないアルカ
サドにマヨラーにゴリラとっ帰るアル」

「ゴリラって酷いよ神楽ちゃん・・・」

「真新組・・・今は休戦しないか??」

「その声は桂!!!!」

「ヅラ何しに来たアルカ??」

「いや大変な事になっているからなお前たちと真新組に知らせよう
と思ってな」

「まあココじゃ何だし中へどうぞ」

「まあいい上がらせてもらっ」

「単刀直入に言う今だけでもいい手を組まないか??」

「何でだ?? お前たち白夜叉の正体わかったんだろ」

「何故知っている??」

「いや調べただけだ」

「まあいいそれで大変なことって何だ?」

「そうアルネ大変なことって何アルカ早く話すヨロシ」

「6日前ある人の墓場に行ったら高杉と銀時と一緒に居たそれを隠れて見ていたのだが聞いてしまったのだ……」

「何をだ?」

「世界をぶっ壊しに行くといっていた」

「何だと??」

「何故それを早く言わないアルカ」

「そうですなんで僕たちに話してくれなかったんですか」

「この6日間調べてきたんだが……」

「どうやら春雨の奴等第七師団と手を組んだらしい」

「なっ神威のバカ兄貴が……」

「なっそれは本当なのか」

「本当だからこうして貴様らに教えている」

第四章 小説読んだら・・・壊れたあ～～～～（後書き）

半端だ～～～～～～

誰か文才をくれ～～～～～～～～

2次元に行かせてくれ

第五章 泣くことは恥ずかしいよねえ〜（前書き）

やばい・・・沖田があハアハア これは銀魂の沖田ではないデス
薄桜鬼〜映画化なつて〜〜死亡フラグは立てないで〜〜
さつき小説読んで泣きましたなのでこんな事に・・・

短いけどGO〜

第五章 泣くことは恥ずかしいよねえ

「万事屋」

「でどうする近藤さん」

「いいだろう手を組もう」

「近藤さんが言うのならア従いますぜえ」

「そうだな」

「僕も戦います」

「私も戦うアル」

「新八君とリーダーはだめだ」

「何でアルカノ何ですか？」

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言いにくい事なのか？」

「ああまあそうだな」

「いいから言うアル
早く吐くヨロシ」

「でも傷つくぞ」

「いいっていつてるネ」

「そうです僕達は大丈夫ですから」

「強いな君達は」

「わかった腹をくくろう・・・」「たとえば君達が銀時の事を『家族』
と言っているにも邪魔つまり銀時や高杉、神威達の『敵』になったら
容赦なく斬る」と本人が言っていた」

「なっ」

「旦那はそんな事言わないぜえ」

「そうアルでまかせアル」

「そうですよ何桂さん嘘を言っんですか？頭可笑しいですよ」

「万事屋がそんな事は言わないと俺も思う」

「俺は・・・近藤さんと同じだ」

「それが本当だとしたらお前らはどうする？」

「それは・・・」

「そもそもそんな事言っはすないアル」

だって紅桜の時に「今度会ったらたたく斬る」って言ってたアルヨ
銀ちゃんがそんな事言はずないアル」

「お前達が信じないのだったらそれでもいい
高杉に操られてるって言う可能性もある

この事はまた2日後に話そうその時まで俺達は調べる」

「わかった」

「近藤さんがそれでいいなら従いますぜえ」

「俺もだ」

「私もネ」

「僕もです」

「じゃ2日後ココに集まろう」

「じゃ帰ろうか」

その日の夜から辻斬りが行われることはここに居る奴らはしるよし
もなかった・・・

第五章 泣くことは恥ずかしいよねえ（後書き）

短いです

すみません

誰か文才をください・・・

第6章 あゝもうネタが浮かばねえ〜（前書き）

ネタが浮かばない〜（泣）

短いし・・・泣きたいよ〜

グサッ

「あああ今度は声も上げずに死んじやったつまんないのお」

「おい銀時・・・」おいその名で呼ぶなって言ったでしょ「そうだったな『白夜叉』」

「そうそう銀時の名前はもう捨てたのだから白夜叉でいいの」

「そうだったな」

「ねえもう帰っていいつまんない・・・」

「そうだなアお前よく一人で56人も殺せたなア」

「それは・・・アイツらが弱すぎるから

ねえ明日もやるの??メンドクサイから万斎にやらせれば?」

「クククッそうだなアそれでいいかア」

「それでさ明後日に『あそこ』に行つて『予告』してこなくっちゃなあ」

「そうだなアお前が行くんだったよな」

「そうそう楽しみだなあ あいつらの顔見てみたい」

次の日 場所は辻斬り現場

「おいこりゃひでえな」

「そうだなあ (クフフツこれでも食らいやがれ)」

ドゥーン

「おい総悟」

「なんですか土方コノヤロー」

「てめえゝ何しやがった!!」

「えっとここに土方コノヤローの死体を増やそうとしたのですが？」

「てめえたたつ斬つてやる!!!!!!!!!!!!!!」

「おいこらっこら今何しに来てるんのか分かるか」

「えっと土方コノヤローの死体増やすためですノ仕事です」

「総悟テメエゝ少しは自重しやがれ」

「チツ しかたないなあ」

「でもこりゃひどいなあもしかすると万事屋と高杉の奴等が関わってるのかもな」

「旦那が関わってるわけねえ少しは頭冷やしやがれ土方コノヤロー」

「トシが言ってることも一理あるな」

彼は一応攘夷志士だったしな　しかも狙われて殺されてるのは天導衆の奴等ばかり

一般人もたまにはいるが見られたから斬ったカンジだしな」

「そんなあ近藤さんまで……」

「この事はまた調べよう
それでいいだろうトシ」

「近藤さんが言うなら……」

この日も天導衆の奴等が斬られて死んだことは言うこともないだろう……

第6章 あゝもうネタが浮かばねえ〜（後書き）

スランプと言う名の・・・

この前から宿題って言ってたけど全然やってません

風邪も治ってませんむしろ悪化してきてる・・・

あああと1日かあ憂鬱だあああ

誰かやってくれ〜

第七章 うゝん……テストだったゝゝ（前書き）

テストが憂鬱ですゝゝ

でもテストで余った時間をオリキャラの設定とか考えてるので……
まあガンバロゝ

短いよ

第七章 うゝん・・・テストだったゝ

「『万事屋』」

「集まりましたか」

「新八は纏めなくていいアル」

「なんだよいいじゃないか僕だって活躍とかしたいのに・・・」

「うるさいアルとつと進めるヨロシ」

「桂さん集まった情報は??」

「すまない・・・手を尽くしたが入ってこない・・・真選組もスマン」

「まあまあ今は大変なんだから仕方ないよ」

ガラッガラッ

突然の音に驚く真新組と桂さん達

音のした方に顔を向けるとそこには・・・銀さんが居た・・・

「銀ちゃんどこ居たアルカ？」

「銀さん心配したんですよ」

そう言つて駆け寄ろうとした新八達を止めた桂・・・

「てめえ銀時じゃねえな」

いつにも増して殺気が掛かった声で言う桂

「そんなあどう見ても銀さんじゃないですか」

「クククッ・・・やっぱバレっちゃうか（笑）」

そう言つて不気味な雰囲気を出しながら笑う銀さん・・・

「そうだよ・・・ようズラッ　僕は銀じゃない白だよ・・・」

白そう名乗った銀さん

「白といったなお前は何モンダア」

「僕の名は白夜叉　知ってるよねククッ」

「白夜叉・・・旦那の体で何やってんですかアい」

「旦那って銀の事？　プクク随分慕われてるね・・・銀の体でつてこれ本当は僕の体ナンダケド自分の体で天導衆の奴ら殺しちゃダメなの？」

「貴様がああいつら斬ってたのか」

「それにあいつの体じゃないってどういう事だ？」

「ツラ知らないんだそうかぁいいよ話してあげるよ」

「僕は最初は銀だった・・・でも白夜叉が生まれて銀に封じられた・・・松陽先生に会う前にね・・・」

第七章 うゝん・・・テストだったゝゝ（後書き）

ハイここまでです

随分と短いなあ自分でも思いますけど違う作品の連載しなきゃいけないんでww

もう1つ増やしますけど・・・ガッコーが始まったんでそってでネタ考えてからの投稿になります
ぢゃアディオス

第八章 いろいろめんどくさいこともわるさ

「どういうことだ？」

「僕が最初は銀だった・・・でも親に捨てられたときに『憎しみ』と『怒り』が出来た。そして戦場に

行ったそしてそのぐらいの時期に『白夜叉』が生まれたそして僕の人格と銀の人格が入れ替わった。そ

して『僕たち』にまた大切な人が出来た・そう『松陽先生』だった・・・・僕は『血に狂う鬼』になっ

た。松陽先生が『アイツ』に殺されて・・・目の前で・・・護れなかった。自分は護られていたのに。

それで僕が『白夜叉』になった。銀はいつも心で泣いていた。だけどそれを気付かれないままここに

た。『時』をまつてその時は銀河ココにいた表面では笑ってでも心では大きな闇を抱えて『憎しみ』

『怒り』『悲しみ』これらが混ざった。今はこうしているけど『時』がきたら僕は消える。それが銀が

んだ事。僕が消えたらこの体も銀のものになる。僕は、銀のためだったらなんでもする。あと5日で僕

は居なくなる。そしたらあいつは本物の『鬼』になる。『血を求めて』ここにさまよう。銀は優しいか

ったのか？でもそれなのに目の前でコロサレタ。だから僕と銀は『復習』する。このことは高杉も知っ

てる。10日後にはココは火の海になる。それまでに命が欲しいんだったら逃げればいい。僕はこれか

らも『狂う』それじゃね もしこの体返して欲しければ5日後にタミナルに來い」

そうして去っていった

「そうだったのか俺はとんだ『偽善者』だ・・・アイツがどんな思いだったのか知らずに・・・」

「そうアルいつも近くに居たのに気付かなかったアル銀ちゃん苦しかっただろうな」

「そうだね神楽ちゃん僕も気付かなかった銀さんの持つてる『悲しみ』に『怒り』に『憎しみ』にでも

僕達と一緒に居てくれた。」

「旦那アそんな過去があっただんですかい俺もまだまだだない」

「万事屋つくソツいつもテメエーは1人で抱え込みやがる。俺等『家族』（仲間）が居るのに」

「そうか万事家は親に捨てられた。大切だった『家族』のかわりの

人まで『目の前で殺された』それは

随分な量だな。本当だったら俺等が助けてやれたのに……」

それぞれの思いはどう進むのか。みんなは知らない

白夜叉が消えて『銀時』が『狂っ』までアト5日……

第八章 いろいろめんどくさいこともわるさ(後書き)

なんかダークですね怖い〜

でわアディオス

第9章 白夜叉がまじパネェ（前書き）

強いって意味でこのサブタイです^^
久々の投稿だあゝ

暴れるぜ（笑

第9章 白夜叉がまじパネェ

「万事屋」

「でっとうするんですか？」

「どうするって何がネ？」

「銀さん助けるんですよ」

「旦那……………」

「万事屋……………俺は……………」

「5日後か……………」

「俺は行くぞ」

「桂さん・・・・・・・・そうですね僕も行きます」

「私も行くヨロシ銀ちゃんを『取り戻す』ネ」

「旦那を取り戻すか・・・・・・・・おいチャイナ女俺もいくぜえ」

「万事屋・・・・・・・・俺も行ってやるよ・・・・・・・・」

「トシ・・・・・・・・よしっ俺も行く」

「銀さん・・・・・・・・」

新八が言葉にしたのは悲しみの言葉
嘆きの言葉・・・・・・・・この言葉は闇に包まれ消えていく

「春雨」

「団長今度はバカな行動取らないで下さいね」

「知ってるよ それよりお侍さんの味方につこうかな？それとも
．．．．．？」

「だんちよ

う 俺等は」

白夜叉』達と手を組んだんじゃないですか．．．
忘れないで下さいよ

」

「あつそうだった
じゃ会いに行くか」

白夜叉が消えて『銀時』が『狂っ』までアト4日．．．

第9章 白夜叉がまじパネエ（後書き）

よっし書き終わった

改めて思っけどコレの前の話意味わかんかった・・・??

なんか途中から銀さん出てないし

どうしよう??

第10話

なんで俺は狂ってしまったのだろうか？

それは『絶望』

彼は『大切だった人』を『目の前』で『殺された』そう『黒夜叉』
に．．．．．

「嫌な夢見ちまった」

これは坂田銀時が思っていたこと……

彼は呟いた

「もう少しで『貴方』の『仇』がとれるたえ『先生』が望んでいなくとも……」

でももうひとつ思うことがある

「（でもお前らは斬ろうと思っても斬れないよ……こんな俺でも『家族』って思ってくれた『仲間』だと言ってくれた『あいつら』のことを）だから……俺は『狂う』事に『したんだ』……なのに白のやつ余計なことしやがって……」

零れ落ちた心の声は本当のこと

だからおれは狂うって決めた・・・・・・・・・・

それが『もう2度と　あの幸せだったあの日々　に【戻れない】と
しても・・・・・・・・

白夜叉が消えて『銀時』が『狂う』まであと3日・・・

第10話（後書き）

こっちもくらいww

こっちはどうしようかな？？

第11話（前書き）

短すぎるぜっ！！

第11話

「神楽ちゃん起きて下さい」

「うっっんまだ眠いアル」

「いいから起きろっ」

「駄眼鏡しんめがねの癖くせに生意気ネ」

「駄眼鏡じゃねえよ新八だっ」

「銀さん起しに行かないと……」

この言葉に落ち込む2人……

「落ち込むなら言つなよ駄眼鏡だから駄眼鏡と書いて新八と言われるアルヨ」

「仕方ないじゃにですか今まで銀さんが居るのが日常だったんですから」

そうこれは『非日常』彼等の言つ『日常』はここに銀さんが居る事・
・・

「銀さんを絶対連れ戻そうね!!」

「銀ちゃんを連れ戻すアル！！駄眼鏡しんぱちは足手まといになるなアルヨ」

「僕だつて剣を使えるんです銀さんを戻すために頑張ってるんですから・・・」

これは彼等神楽と新八の『非日常』

白夜叉が消えて『銀時』が『狂う』まであと2日・・・

第11話（後書き）

新八はバカだよね^^

駄眼鏡だからね^^
w
w

第12話（前書き）

桂さんですよっ

第12話

銀時が真実を話して3日が経ち4日目に入った……

「おい銀時のこと調べてるか？」

「ハイしらべてるそーです」

俺は俺の相棒^{エリザベス}に聞いた

「そーかでもなんで高杉にしか話さなかったんだろうな？？」

「それは敵になることを知ってたかもしれない」

「エリザベスそんな事言わないでくれよ今は………アイツ銀時のこ
とを信じたいんだ」

「そうですねあんな日々を送ってたんですもんね………」

かつては仲間だった………それは『松陽先生』がいたから出
会い一緒に戦った……

『松陽先生』の『仇』に………

「頑張ろっな一緒にエリザベス」

「そうですね桂さん」

白夜叉が消えて『銀時』が『狂っ』までアト1日・・・

第12話（後書き）

ハイ

ラストは真選組です

がんばろ〜

番外編（前書き）

番外もたまにはいいかな〜と思い書いていました

番外編

銀時

「おい……なんで俺が悪役なんだよ」

作者

「なんとなくです」

神楽

「銀ちゃんは悪役が似合うアルヨ」

銀時

「神楽はそんなこと言うのかよ……」

新八

「確かに似合いますよね」

銀時

「おいダメガネ今何つつたアアン」

神楽

ダメガネ
「新八もたまにはいいこと言つアルネ」

新八

「誰がダメガネだっあああああ！……！！……！！……！！」

作者

「いやどっからどこ見てもメガネで地味でダメ人間でしかも童貞だからさ」

新八

「どっでもいいだろう……童貞とか……！」

神楽

「別にいいアルヨ」

新八

「殺りますか??」

作者

「いいよやるおか!!」

銀時

「ああもうあの二人はほっといてももう少しで最終回になるから絶対見るよ」

高杉&沖田

「「見てくれた女にはサービスしてやるよ!」!」

土方

「高杉イイ神妙にお縄につけえ」」

作者

「土方アアアア高杉様が捕まったら話がすすまねえから一回死んどけよな」土方コノヤロー」

土方

「俺の扱いひどいだろ」」

みんなで!!

「次回も見てくれよな~~~~~」

桂&近藤&山崎

「俺らは???」

作者

「ザキイイかわいい~~~~」

山崎

「~~~~~ありがとう~~~~~」
「ニコッ」

桂&ゴリラ

「うわぁずるいぞ〜」

「てかゴリラって・・・」泣

みんなで（本当に）

「ばいばい〜」

第13話

真選組

「はあ〜」

「どうしたんですか？近藤さん」

「ああ〜トシか・・・いやな早く前みたいに戻らないかなってよ」

「そうつすよねえ」

「総吾いたのか」

「だって今日で5日目だから・・・」

「マジかよ」

「もしかして忘れてたんですかい」

「あっああ・・・」

「まあいいですよ今日は」

「お前にしちゃ珍しいな」

「ひどいですう〜」

いつもの会話をしながらターミナルに向かうのだった・・・

銀時が―――まであと少し

第13話（後書き）

すみまゝええええん

総吾はキヤヲ崩壊してます

すみませんでしたあゝゝ

第14話

ターミナル

「お前まで来たんだ高杉・・・」

「白が余計な事言っからなア」

「そつだよなあ・・・」

「っはああ」

そこは銀時と高杉がいる場所にあいつらはやってきた

「はああはあ
」

「ヅラあゝお前体力なくなってきたんのかあゝ
」

「あつ 高杉
」

「ツラぢやない桂だ!!!!!!」

「銀ちゃん戻るアル」

「神楽スマネエな俺は……『あの人』のために戦うんだ」

さいこの言葉はこれだった……だが聞こえたのはたぶん桂と高杉だけであろう

・ 聞いていても『あの人』は誰のことだろうとしか思わないだろう・

「おい旦那ア俺ら待ってますぜエイ」

「何をだ???」

「それは・・・」

「『お前を／銀ちゃんを／万事屋を／銀さんを／取り戻す／アルヨ』」

その言葉を聞いたとき

銀時は・・・白は・・・嬉しかった・・・

「（なんで俺をここまで必要としてくれんだよ）」

「（銀は幸せ者だな　銀は気づいてるんでしょ　この気配・・・・・・・・）」

白は・・・最後のほうは悲しそうだった・・・

「こんなとこでなにしてるんですか？」

その声が聞こえたとき・・・皆は固まった・・・

それと同時に銀時は・・・桂は・・・高杉は・・・

「「「っ・・・何で・・・ココにいらんだよう・・・いるんですか？？」」

不思議だった・・・

「本当に貴方達なんですか？」

神樂たちはわからなかった・・・いや知らなかったこの人が誰なのかを・・・

いや知る由もなかった

だって目の前にいるのは・・・

銀時たちが・・・何のために戦っていたか・・・その理由の
人だったから・・・

「・・・・・・・・っ本当に先生なのか？」

「銀時久しぶりですねっ！」

小太郎も

晋助も・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」

そのときに神樂たちが見たのは・
・
・

『3人の』
・
・
・
・
・
・
・

いや

『4人の』泣き顔だった

「会いたかった・・・」

「銀時は相変わらず子供ぽいですね（苦笑）」

バーン

突然響く銃声・・・

そこにいたのは・・・

第14話（後書き）

次回最終回・・・

の予定です!!

最終回（前書き）

死ネタです

最終回

「あっ・・・・・・・・・・」

突然倒れる銀時・・・・・・・・

撃たれた方に立っていたのは・・・・・・・・

神威と

黒夜叉だった
・
・
・
・
・
・

「フフフウッ」

笑っていた

黒夜叉だけが

不気味に笑みを浮かべていた・・・

「銀チヤアアアアアン」

「銀……さん？」

二人は駆け寄った

と同時に

「馬鹿兄貴銀ちゃんに何しタアアア」

神楽はもうコワレテイタ

銀ちゃんが撃たれた時に

もうすでに

銀ちゃんの意識は朦朧としていた・・・

「っクソ・・・・・・・・・・かぐ・・・・・・・・らっ・・・・・・・・幸せに・・・・・・・・っ・・な
れ・・・・・・・・よ・・・・・・・・新八もっな・・・・・・・・土方・・・・・・・・と　総悟っ・・・・・・・・
・・・・・・・・こいつら・・・・・・・・うい・・・・・・・・たの・・・・・・・・んだ・・・・・・・・ぜ」

バタッ

と

音がした

と同時に・・・・・・・・

死んでいった

「ああお侍さん死んじゃった」

「神威くくくく」

「じゃバイバイ」

神威は黑夜叉とともに姿を消した

そして・・・

先生も一緒に・・・

銀ちゃんが死んで残ったのは・・・

かつて一緒に戦った『仲間』と

一緒に楽しい日々を過ごした『家族』『仲間』の

悲しい顔と涙・・・そして叫び声だけだった・・・

【完】

最終回（後書き）

なんか最後は死ネタになってしまいました・・・

感想を俺にくれっ!!

では次の連載でお会いしましょう!!

see you next time!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0015w/>

白の夜叉と銀の・・・

2011年10月9日15時24分発行